

## わが家の「道中日記」

清水 貴子

はじめに

柴桂子さんの主宰する「東京・桂の会」に入会して二年。親しく先輩諸氏の指導を得て古文書の世界に足を踏み入れることができた。入会のきっかけは、たまたま柴さんの活動を紹介した雑誌を読んだこと。近世の女性史研究一筋の信念と活力ある行動力に惹かれた。また、直載的には私の実家に現存する古文書数点をなんとか解説してみたいとの思いに他ならない。数点のうちのひとつはまさに江戸期の女性の旅日記で弘化二年（一八四五）居住地である埼玉県川越市から日光までの参詣の旅を記したものである。著者は松本歌尾（本名須衛・天明三年・一七八三―文久三年・一八六三）。墓碑文によれば「松本三世善兵衛の娘 善兵衛没した後、家産の没落を大いに憂い鍋島公に仕える 終身嫁かず 笠幡村の栗原新右衛門次子民蔵を養子とする」とある。

この女性の奉公先はどこか、またその地位、俸禄、そのころの生活ぶり、また、この旅日記を書いた頃（著者六十二歳）の旅の様子、同行者、さらには残されている断簡などでその姿が浮き彫りになるかなど、興味は尽きないが、今回は中間報告のつもりで本文の翻刻のみを掲載し、お許しただく。

（表紙）

乙 弘化二年

道中日記

巳 四月吉祥日

（扉）

卯月二十一日

日光

光江様出立

卯月二十一日

日光様へ出立致候に付松山いなりえ参詣致 夫より松山宿柵屋にて喰事致 夫より上岡の観音様へ参詣致 夫よりカ野原 文子様へ参詣致 夫より熊ヶ谷松坂屋やとまり七時半時比付  
二十二日

熊ヶ谷より妻沼聖天様参詣致 夫より大田大光院とん龍

様へ参詣致御座敷御たま屋殿御はいいたし三たい様御はい致 夫より大田はせをや翁助殿とまり  
二十三日

あしか□□わたらせ川渡し大日堂へ参詣致 夫より山川

裏大保平塚寺岡の渡し さる橋天明さかや茶つけ いぬふしふし花やすみよねまんちう 夫より岩船湯みねにて福田や弥惣治殿に溜  
二十四日

岩舟ふもと溜 福田や弥惣治殿に溜

二十四日

宮小の寺□□処小町塚中村くつう宿にて中飯 せううん

し村下仙波はねつる峠立木地藏様 伊つる仙地観音様半書十七番 岩むら観音様 佐の半書三十三番岩む路大日様参詣致 伊つる宿山や半兵衛殿方溜 岩舟より伊つる迄五里半  
二十五日

長の橋大こひ峠かすを川の橋渡しやすみ 柏もちたへ松崎あをのの宿中飯 三里十丁西沢なんま新田か沼溜まり  
二十六日

今市からかさや中飯 日光宿迄七里 紙や半兵衛殿溜二夜逗留致 二十七日御宮拝見申上 夫より所々へ参詣致

夫よりきりふりの瀧 二十八日 ねん□□□の大日様参詣

致 夫よりかんまんのはけ地藏様へ参詣いたし 日光出立

致 今市からかさや溜

二十九日

今市より大沢こひけ徳治郎上中下 うつの宮迄七里さくや溜 晦日うつ宮 明神様へ参詣致 すすめの宮石橋中飯 小金井新田小山宿まで七里 あまのや溜 まま田野木大明神様へ参詣致 小賀中田中飯舟渡しくり橋 さて（幸手）たんけい寺様へ溜 小山よりさて迄八里 さてく木（久喜）弥かね橋二ツ宮氷川大明神様へ参詣致 上尾宿じん溜 さてより六里

日記

四月二十一日

二百文御初穂 カ茂田様分 五百六十文松山迄かこ五百五十文わらし  
二十二日

百文大田路うそく代百文わらし□はたこ□わらし□茶代  
□ 八十四文の原わんち□

二十二日

二百二十文大田はたこ茶代

二十三日

六百十二文溜わらし 二十四文あんま

二十四日

六百二十四文はたこ わらし

二十五日

二朱二十四文かこ 五百十文はたこ わらし

二十六日

二百文御初穂 二百二十二文中飯わらし 五貫百文先に

残り分 是迄小けい四百二十九文 金一兩一分元遣し

二十七日

六十〇御札 四百二十九文

二十八日

二文菓盆二枚 二十六文しやくし二本 百十文とふから

し三箱 たは〇〇 二十八日 二朱三百三十八文日光はた

こ 二十八日 百五十文わらし 二百文わらし 請〇 百

文柏餅 二十八日 三百四十文今市はたこ

二十九日

四百四十文うつの宮はたこ わらし

三十日

二朱二百文石橋より小山迄かこ 五百六十七文はたこ

わらし

五月一日

百三十四文はたこ わらし

二日

五百二十九文はたこ わらし 二朱三百文かこ 五百十

二文

五月八日

一〇五十四文人代

十三日

二朱二十九文わり金

(裏表紙)

川越南町住 松本歌尾

# 道中日記考

松本歌尾は弘化二年(一八四五)四月二十一日、川越から日光へと旅立つ。往路七日、復路六日の旅である。行程と宿泊地のみの記述なので、旅の目的や同行の人数など詳らかでないが、著者はこの時代には珍しく八十歳の天寿を全うしているの、六十路とはいえ一日平均七里の行程、まだまだ元気でこの日光詣を充分に楽しんだであろう。同年四月六日、孫娘まつ、の誕生と重なることから、お札詣の意味も含めていたかとも推測できる。

この日記については、さらに内容を読み取り、地名や神社仏閣、旅籠などについて調査したり、実際に歩いてみた

りするつもりである。また、当時の金銭についても調べてみて、どんな人とのどんな旅だったのかも知りたい。勉強をはじめたばかりでまだわからないことづくめ。先輩の教えを乞う次第である。

道中日記については無記名で残されたものがもう一冊あり、嘉永三年(一八五〇)に記されたもの。三月五日から五月二十七日までを川越から金比羅までの往復の旅の記載がある。現在、桂の会の方々に助けていただきながら読み進んでいるところである。他の文献についても、地道に解読して活字化させるのをこれからの私のライフワークとしたい。

## ルーツを求めて

弘化二年(一八四五)に六十二歳で日光へと旅に出た松本歌尾。その孫娘にあたる松本まつ(弘化二年一八四五、昭和二年一九二七)という女性もまた武家奉公を経験していた。この人のちらし書きなども残されている。十三から十七歳(安政六、文久三年)まで細川家に奉公に上がっていたという。その頃の実家は川越市南町の茶問屋で屋号を「松民」。まっは奉公の後、婿を迎え「松民」を継ぐが、三男を得てから離縁、女主人として店を商う。明治二十六年の川越大火により店、家財のすべてを焼失。晩年は市内大

字松郷の蓮馨寺境内に住居を移し、三弦を教えて生計を立てていた。息子、嫁、孫のほとんどに先立たれ、ついには一人残された孫、圭三と二人暮らしとなり昭和二年(一九二七)、まっは八十二歳で亡くなる。

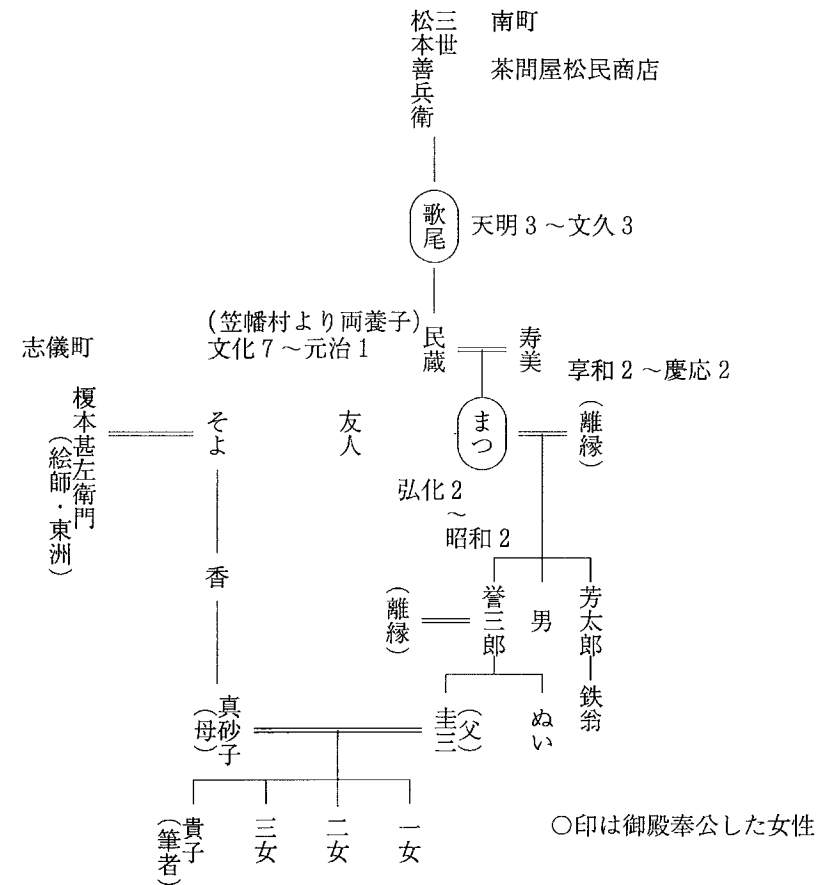
この圭三が私の父で、このとき十八歳。松本家でただ一人となった父は家をたたんで、住み込みで働くこととなる。現存の文書類は生前「まつ」と親しかった榎本そよ(川越市志儀町)に託されていた。後年、圭三とそよの孫娘である真砂子の結婚が決まった時、そよから「松本の家に入るのなら」と真砂子に手渡された。真砂子は私の母、今年で八十四歳になり健在。

大火、震災、戦災を経て、百五十年経った松本家文書が女から女へと引き継がれて今、私の手の中にあるの、が、いい、おもしろい、と思うのである。



右-松本まつ  
左-榎本そよ(真砂子の母)

## 松本家系図 (埼玉県川越市)



〒二五七-〇〇〇三  
 神奈川県秦野市  
 南矢名三百八十五-十  
 TEL FAX 〇四六三一七八-一八二三

